

第三十七回 齋藤茂吉短歌文学賞

谷岡 亜紀 『ホテル・パセテイツク』

ながらみ書房

選考委員

委員長 三枝 昂之

委員 小池 光

小島ゆかり

永田 和宏

【贈呈式】

令和八年五月十七日（日）

（五十音順）

谷岡 亜紀 『ホテル・パセテイツク』（自選）

ラベンダー香るトイレで眠りたいこの世がもしも夢ばかりなら

頭上にて鴉がわれを呼びており 羯諦ぎやてい、羯諦ぎやてい「遠く行く者よ」

父がまだ変になる前描きたる自画像は帽子を取りて手を振る

ブリキ缶入りのサクマのドロップスの薄荷の飴を好みし母よ

死に向かう命生かすと苦しめて「もういいです」と言う日を怖る

ラジオを消し眼鏡を外し今日母はきっぱりと一人の旅に立ちたり

我がことを蛇蝎だかつのごとく憎みいるその人もまたこの世の光

東京に桜咲く春、凍りつく大河を渡る人々がいる

その人は白きベッドに眠りおり生まれたてなる今日の窓辺に

始まりの光は朝の窓に差しやがて静かに目覚める人よ

● 選考委員による選評

人生という試練

三枝 昂之

谷岡氏は時代の病理を撃つ独行的な世界で短歌の世界に骨太な抒情を吹き込んだ。その特徴に時間軸の奥行きと人生の不可避の有限性を重ねたところに今回の「ホテル・パセティック」の特色がある。

哈爾濱の夕日黄色く濁りつつ記憶の路地を母は  
辿り来

転倒し、搬送されて入院し、転院し、入所し、  
表情を失う

若き日の父の描きし母にして朝の窓辺に俯きて  
おり

くるおしく朽ちゆく老いゆく死んでゆく春はひ  
もじく過ぎてゆくいつも

遠い男女が巡りあう偶然という奇跡、日常些末から生まれる悲劇、若き二人の匂うような幸福。

中途半端な反応を許さない即物的な世界、人生の幸福と苛酷。谷岡亜紀氏ならではの精神力を再確認させる新しい成果を喜びたい。

凝視する力

小池 光

谷岡亜紀氏の歌集「ホテル・パセティック」は、現代の荒涼とした世界を、正面から歌った一冊として記憶に残るものである。特に年老いた父と母との別れの歌が点在して、こころ打たれた。

新聞に自分の死亡記事はもう出たかと父がまた  
聞きに来る

鳥の声微かに聞こえこの世での母の最後の朝が  
明けゆく

死者とその付き添いだけが乗ることを許された  
エレベーターのドアがいま開く

厳粛にして、今やありふれた光景なのだが、決してどこにも「かなしい」という言葉、それに類する言葉が出てこない。作者は、ただ凝視するのみであり、その凝視する目線の力が、実につよい。よき歌集を得た。

## 時間をかみしめる

小島 ゆかり

父も母も一人で行けり晴れ晴れと鳥が帰ってゆく西の空

「時は夢のように流れ去って行った」という一文で終わる「後書」が、本歌集のテーマを鮮やかに語っている。かつての「パシフィック・ホテル」の名を「ホテル・パセティック」と変えて歌集名に掲げた。そこにこめられた思いは、過ぎ去ってゆく時間をかみしめる深い感傷である。とりわけ父母の老いと死にまつわる作品は、虚飾を排した人間的な悲しみに満ちて忘れ難い。

転倒し、搬送されて入院し、転院し、入所し、表情を失う

青深き二十歳の母の肖像をイーゼルに掛け死を見送れり

杖を持たせカーデイガン着せて穏やかな秋の渚を父と歩みぬ

齋藤茂吉短歌文学賞に、またすばらしい一冊が加わった。おめでとうございます。

## 誰もがどこか少し壊れて―谷岡亜紀の魅力―

永田 和宏

夕風の屋上に影曳きて立つ誰もがどこか少し壊れて

歌集の冒頭歌。そう「誰もがどこか少し壊れて」いるのが私たちなのだが、もっとも壊れているのが自分だという思いが谷岡亜紀にはあるのだろう。

私は長く谷岡の、そんな少し壊れている部分を偏愛してきたきらいがある。真面目な歌人のなかで、どこかで爆発しそうな起爆力を怖れつつ期待してきたのかも知れない。今回の歌集名「ホテル・パセティック」にもその片鱗が感じられる。

本歌集では、父母の看取りと見送りが中心となるが、特に、おそらく若い時にはお互いに強く反発もしたのであろう父をめぐる歌の数々が印象に残る。

おれもそうなるかも知れず妻をなじり自分をなじり檄して父は

杖を持たせカーデイガン着せて穏やかな秋の渚を父と歩みぬ

死者とその付き添いだけが乗ることを許されたエレベーターのドアがいま開く

谷岡亜紀の新しい展開を示す歌集になるのである。

## 受賞のことば

谷岡 亜紀

私が毎月持っている幾つかの短歌講座の中に、東京青山と梅が丘の教室がある。青山教室へは、地下鉄表参道駅から青山通りを青山一丁目交差点まで歩く。青山通りは東京でも有数のお洒落な通りだが、ほんのひと所だけ焼け跡のような雑草の空き地が残っている。この道を私は、齋藤家の青山病院の在りし日の威容を想像しながら、いつも歩いている。

小田急線梅が丘の駅から北に歩くと、世田谷区松原という場所に到る。ここに、火事による焼失後に青山から移転した、齋藤病院があった。北杜夫さんが確かその近辺に住んでおられたと思う。私は小説「楡家の人びと」を愛読するが、その中に、齋藤紀一がモデルの主人公が、病院再建のためにまだ野原だったこの地を訪れて、発作に倒れる場面があった。私にとって青山も梅が丘も、どことなく懐かしい土地である。その齋藤茂吉の名を冠する賞をいただけることは、私にとって望外の喜びと言うほかない。

このたびの選者の皆さんはいずれも、私が長年敬愛し信頼してきた先輩方である。その皆さんから歌集を褒めていただけることもまた、大きな大きな喜びである。



### 第37回 齋藤茂吉短歌文学賞受賞者歴

#### 谷岡 亜紀 (たにおか あき)

歌人。1959年（昭和34年）高知県生まれ 神奈川県在住 66歳。  
短歌誌「心の花」選者。

#### 【主な著作等】

- 歌 集：平成5年『臨界』、平成11年『アジア・バザール』、  
平成18年『闇市』、平成27年『風のファド』、  
令和2年『ひどいどしゃぶり』、令和7年『ホテル・パセティック』
- 評論集：平成5年『〈劇〉的短歌論』、  
平成8年『佐佐木幸綱 人と作品総展望』、  
平成30年『言葉の位相』、令和5年『歌人の肖像』、  
令和6年『鑑賞#佐佐木幸綱』
- その他：昭和64年『短歌をつくろう』、平成12年『歌の旅』、  
平成20年『鳥人の朝』
- 受賞歴：昭和62年 第5回現代短歌評論賞  
平成6年 第38回現代歌人協会賞  
平成19年 第5回前川佐美雄賞、第12回寺山修司短歌賞  
令和元年 第17回日本歌人クラブ評論賞、第6回佐藤佐太郎短歌賞  
令和2年 第25回若山牧水賞

これまでの受賞者

- 第一回 岡井 隆  
 『親和力』 砂子屋書房
- 第二回 本林 勝夫  
 『齋藤茂吉の研究―その生と表現―』 桜楓社
- 第三回 塚本 邦雄  
 『黄金律』 花曜社
- 第四回 前 登志夫  
 『鳥獣蟲魚』 小澤書店
- 第五回 斎藤 史  
 『秋天瑠璃』 不識書院
- 第六回 近藤 芳美  
 『希求』 砂子屋書房
- 第七回 小暮 政次  
 『暫紅新集』 短歌新聞社
- 第八回 馬場あき子  
 『飛種』 短歌研究社
- 第九回 吉田 漱  
 『白き山』 全注釈』 短歌新聞社
- 第十回 佐佐木幸綱  
 『呑牛』 本阿弥書店
- 第十一回 伊藤 博  
 『萬葉集釋注』 集英社
- 第十二回 森岡 貞香  
 『夏至』 砂子屋書房
- 第十三回 竹山 広  
 『竹山広全歌集』 雁書館・ながらみ書房
- 第十四回 藤岡 武雄  
 『書簡にみる齋藤茂吉』 短歌新聞社
- 第十五回 清水 房雄  
 『獨孤意尚吟』 不識書院
- 第十六回 小池 光  
 『滴滴集』 短歌研究社
- 第十七回 三枝 昂之  
 『昭和短歌の精神史』 本阿弥書店
- 第十八回 花山多佳子  
 『木香薔薇』 砂子屋書房
- 第十九回 永田 和宏  
 『後の日々』 角川書店
- 第二十回 河野 裕子  
 『母系』 青磁社
- 第二十一回 伊藤 一彦  
 『月の夜声』 本阿弥書店
- 第二十二回 品田 悦一  
 『斎藤茂吉―あかあかと一本の道とほりたり―』 ミネルヴァ書房
- 第二十三回 篠 弘  
 『残すべき歌論―二十世紀の短歌論―』 角川書店
- 第二十四回 秋葉 四郎  
 『茂吉幻の歌集』 『萬軍』 ―戦争と齋藤茂吉―』 岩波書店
- 第二十五回 栗木 京子  
 『水仙の草』 砂子屋書房
- 第二十六回 小島ゆかり  
 『泥と青葉』 青磁社
- 第二十七回 柏崎 驍二  
 『北窓集』 短歌研究社
- 第二十八回 橋本 喜典  
 『行きて帰る』 短歌研究社
- 第二十九回 大辻 隆弘  
 『景德鎮』 砂子屋書房
- 第三十回 春日真木子  
 『何の扉か』 角川文化振興財団
- 第三十一回 吉川 宏志  
 『石蓮花』 書肆侃侃房
- 第三十二回 大島 史洋  
 『どんぐり』 現代短歌社
- 第三十三回 岡野 弘彦  
 『岡野弘彦全歌集』 青磁社
- 第三十四回 佐藤 通雅  
 『岸辺』 角川文化振興財団
- 第三十五回 玉井 清弘  
 『山水』 短歌研究社
- 第三十六回 本多 稜  
 『時剋』 本阿弥書店

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局

〒九九〇―八五七〇 山形市松波 丁目八一―

山形県観光文化スポーツ部県民文化芸術振興課内

TEL・〇三三一六三〇―二三〇六